OSAKA・II ZONTA CLUB

大阪Ⅱゾンタクラブ第36号（2013年9月）

巻頭言

大阪Ⅱゾンタクラブ20周年記念事業無事終了

会長　河村　さと子

2013年4月7日に私ども大阪Ⅱゾンタクラブは20周年の成人式を迎え、その記念式典をリーガロイヤルホテルに於いて、和やかに行いました。

ささやかながらも、五感に届く温かいくつろぎ感に満ちた、実のあるひと時を持ちたいと願った私どもの気持ちが御客様方に充分に届いたようで、方々からお褒めのメッセージを頂きました。

この20年間、私どものクラブを見守り、育てて下さいました全国のゾンタクラブ諸姉の皆様方に深く感謝致したいと思います。

国内や国外への寄付活動こそ、率先して活発に行ってきた大阪Ⅱゾンタクラブですが、今後は先輩クラブの皆様の期待に応えて、後進のゾンタクラブに対して、指導力のあるクラブを目指して、成長していきたいと思います。

来たる10月には、次期リエゾンを迎え、岡山で地区大会が開かれます。その機会に奮って出席し、ゾンシャンとしての国際感覚を一層身につけたいと思います。

大阪Ⅱゾンタクラブ各位の更なる意識向上を望みます。

全員集合

大阪Ⅱゾンタクラブ20周年記念式典をおえて

堀　知子

4月7日（日）リーガロイヤルホテルにて大阪Ⅱゾンタクラブ設立20周年記念式典がとり行われました。前日から台風なみの大型低気圧のため、日本中が暴風雨に見舞われましたが、日本各地より大勢のゾンシャンにお集まりいただき、また多くのゲストと共に盛大に祝っていただきました。

吉川涼子様の司会で田中茂美実行委員長の開会宣言で式典が開催されました。河村さと子会長のウイットに富んだ挨拶、国際ゾンタ会長の英文の挨拶が代読され、続いて来賓の26地区ガバナーの三宅様より祝辞をいただきました。祝辞の中で、UN Womenに関してこれからガバナーが推進しようと考えられていたようですが、その前に大阪Ⅱゾンタが先んじて取り上げたことに対してお褒めの言葉をいただきました。またＳＯＭ委員長の佐々木静子様よりお言葉をいただきましたが、ご高齢にもかかわらず力強く私たちを導いてくださり温かく見守って下さるお気持ちが十分伝わりました。

次に今まで奉仕をしてきました7団体の紹介と、それぞれに寄付金の贈呈をいたしました。代表としてベトナム・ベンチェ障がい者と孤児職業訓練センターのト・ブー・ルーン氏より流暢な日本語でお礼の言葉をいただきました。2001年からベトナムの障がい者の自立支援のために、奨学金を贈ったり、刺繍製品の販売をしたりしてきましたが、今回20周年の記念事業として障がい児学校の卒業生に職業訓練の作業所を寄贈しています。

次は写真家の大石芳野様の記念講演です。「アジアに生きる」との演題でアジアに住む女性や子供の写真をカラーで、エピソードを交えながらわかりやすく解説していただきました。悲惨な状態の中にいても、質素ながらも華やかさを秘めた文化や生活を、ファインダーを通して私たちに伝えて下さいました。また先の東日本大震災で土やいのちを奪われた人々の姿をモノクロ写真で紹介されました。怒りや苦悩、そしてそんな中でも逞しく生きる人々の様子が見事に表現されており、私たちの心に響きました。

最後に坂本会員より、1993年設立以来20年間の活動内容が報告されました。数年前に入会しました私にとっても非常にわかりやすく解説され、参考になりました。

今回記念式典が無事とり行われましたことは河村会長、田中実行委員長をはじめとして、会員一同が一致協力して準備してきた成果と思われます。今後も地道にさりげなく奉仕活動が続けられるよう願っています。

来賓の方々

会長と実行委員長

ト・ブー・ルーンさん

大石芳野さん

祝宴

西村　博子

田中実行委員長の挨拶で開宴いたしました。20歳の成人式を迎えた当クラブ、皆様のご指導とご支援があってこその道、そのお礼、そして、これからもそれぞれの特技を生かして、力をあわせて歩むことを述べ、一層のご支援をお願いいたしました。引き続きエリア３エリアディレクター岡澤則子様に乾杯のご発声をいただく中で、当クラブの奉仕活動に対して、とても大きな活動を沢山しているが、それをさりげない奉仕活動という言葉で発表していたこと、その言葉に魅力を感じたこと、また中堅クラブとして自らのクラブ活動のみならず、エリアや26地区全体に是非その持てる力を結集していただきたいという願いのこもったご挨拶をいただきました。その後、各クラブ紹介。４つのエリアから、北は札幌Ⅱをはじめ、南は北九州ゾンタクラブまで、27クラブから総勢72名のご参加をいただきました。当日の天候不良で交通手段がなくなり、ご参加が不可能になりました高松Ⅱの皆さまには、大変ご心配をおかけいたしました。

「祝宴コンサート～至福のオペラ・グルメ～」と題して、引き続きロイヤルホテルの美味しいフランス料理に舌鼓をうちながらコンサートがはじまり、宴はたけなわになりました。バリトン歌手澤井宏人様のおおらかな美しい歌声は、オペラ『椿姫』より「乾杯の歌」にはじまり、『フィガロの結婚』より「もう飛ぶまいぞこの蝶々」、『カルメン』より「闘牛士の歌」、そして「わが太陽」、「彼女に告げてよ」、「忘れな草」、喜歌劇『メリーウィドー』より３曲と、金岡優子様のピアノ伴奏と共に演奏が続きました。聴衆の私達にも身近な選曲で、楽しく拝聴できて嬉しいことでした。

河村会長も汗だくでこの演奏に加わり、変わらぬ美しい声を披露。美味しいお食事をいただきながらオペラを聴くという豊かで贅沢なひと時を演出して下さいました。演奏者の方々に厚くお礼申し上げます。閉宴にあたり、内藤副会長からお礼の言葉をのべて散会となりました。

ご出席くださいました皆様の温かいご支援・ご協力に心よりお礼申し上げます。

会場風景

澤井宏人さん（バリトン歌手）と河村会長のデュエット

ベトナムベンチェ省特別支援児学校の職業訓練施設を建設

宮本　典子

思えば２年前、20周年記念事業に何をするかというアンケートに、ベトナムを応援しよう、が１位となりました。その頃ベンチェの特別支援児学校では古くなった校舎の新築が進み、支援を続けていた刺繍教室の今後が心配になっていたところでした。これまで廊下を仕切ったり、職員用の宿舎の一部を都合して教室にしていました。

ベンチェはメコンデルタの下流にあって水路が多く、移動手段もない障がいを持つ子ども達は全員、学校に寝泊まりして勉強しています。新しい校舎にそのスペースがなければ、せっかく作った刺繍教室の生徒達も行き場がありません。中には親のない子もいるのです。この子達の仕事場兼アパートを作ったらどうだろうか、そのような考えを持っていることと、もしゾンタの記念事業にすれば、２年後には完成していることが望ましい企画であることを条件に、ベトナム側の今後の考えをト・ブー・ルーンさんに聞いていただきました。

そして昨年４月３日、これまで教室の運営のお世話をいただいていた『ベンチェ省貧困病人と障がい者の支援会』のレ・フインさんから、現在の特別支援児学校の一部を改修して、障がい者と孤児のための作業施設を作る案が提示されました。ベトナムにしてはとても早く、既にベンチェ省の設立許可もおりたということでした。内容は、特別支援児学校の10教室を改修してホールと教室６、付属施設を作り、刺繍教室のみならず、コンピュータ、縫製、手工芸クラスを開設するというものでした。

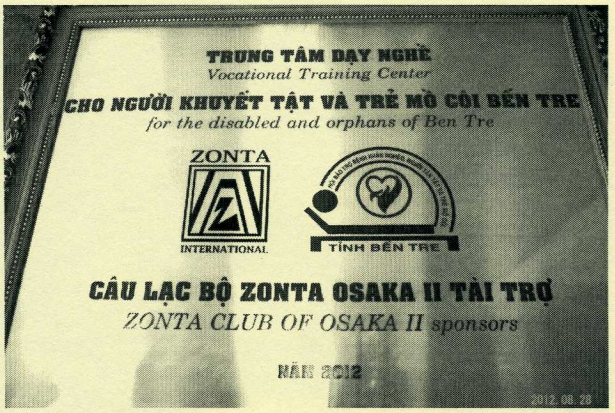
早速検討し、企画書を作って４月の例会に提案しました。こちらの予算も勘案し、メインの建物はもちろん必要ですが、新しい縫製クラスのための工業用ミシン10台と、コンピュータクラスのためのメインコンピュータを加えた予算案でした。

この予算額は、当日検討された20周年の特別会計の予算と不思議にぴったりで、以前から打ち合わせていたようだとびっくりされました。６億８千２百29万２千ドン（約260万円）、これだけあれば、教室を改造してとりあえず、新しいクラスも開設できます。残りのミシンは１台ずつ個人的に浄財を集めることとしました。

ところがベトナム側はお金をすぐ欲しいと、決まればすぐ発注できるよう待っていたらしいのです。こちらはまだ１年あるとのんびり構えていたのですが同じ年度だしと会計さんに無理を言って、急いでお金を調達していただきました。そして９月には新クラスが開設されました。こうして迅速に事を運んだことは、大阪Ⅱゾンタにとってはラッキーでした。当時は予測もしていなかったその後の為替の成り行きは、のんびりしていたら確実に事情が変わっていたことでしょう。海外の絡んだお金のやり取りはこんなこともある、とお勉強したことでした。

特別支援児学校。午前中の大雨で庭は水びたしでした。

刺繍クラス。20名ですが、教室は２つあります。



訓練センターにはゾンタとベンチェ省障がい者と孤児を守る会のロゴが掲げられています。

大阪IIゾンタクラブ会長から訓練センター設置資金を「守る会」会長レ・フインさんにお渡しする。

682,292,000ドンの授与式。

刺繍クラスは全員耳が不自由な生徒ですが、さらに肢体不自由を併せ持っている子もいます。その中から去年までに10人が結婚し3人の赤ちゃんが生まれました。

去年結婚したTienさんは妊娠中ですが、クラスに残って刺繍を教えたり、経理を手伝ったりしています。

新たに作った縫製クラス用ミシン。ジューキの日本製工業用ミシンで、ベトナムで買えば、1台41000ドン(1年前の値段)。刺繍に向いていない子や男の子は縫製を習います。縫製のできる子はそれで就職もできます。

エリア3第5回エリアミーティング参加報告

久岡　眞佐代

4月20日、牛田、西村、宮本、久岡の4名で、福井県あわら温泉「グランディア芳泉」で開催されたエリア3第5回エリアミーティングに出席しました。春到来かと思えば真冬に逆戻りといった寒暖の差が激しい天候が続いていましたが、その日は少し雨交じりの適度な気温が心地よい1日でした。

開会前の会場に入るとエリア3より113名、エリア3以外より44名、合計157名という大勢の出席者で大変賑やかな雰囲気に包まれていました。エリア通信4月1日号で、「簡素・気楽」がモットーですが、まごころだけは十分に尽くしたいとホストクラブ共々考えていますという岡澤エリアディレクターの巻頭言を思い出し、会議を楽しもうとのんびり着席しました。

ところが、いざ会議が始まると、以下のとおり、いろいろな工夫や改革が施されており、驚きの連続でした。いくつか気づいた点を紹介します。

①登録料は12000円でしたが、当日、2000円の返金を受けました。福井ゾンタクラブの皆さまのアイデアとホテルのご協力により、そして岡澤AD曰く"少しでも財布にやさしいゾンタ、登録料1万円のエリアミーティング"の実現でした。

②プログラムとAM資料が合体されて1冊となり、合計8ページという薄さでした。

③特に、AM資料部分は1ページでした。各クラブの1年間の活動報告の掲載はなく、定期的にエリア3通信で詳細に紹介しているので改めて掲載する必要はないとのことでした。

④国内外への奉仕金額についてもエリア3全体の合計額のみ掲載され、各クラブの奉仕額は一切掲載無しでした。各クラブの奉仕金額を公表して競うような掲載は好ましくない、エリア3全体の奉仕金額が公表されれば十分という理由でした。

以上の改革について出席者から反対意見はなく、最後に豊田副ガバナーが「プログラムは簡素だが、充実した内容」と講評されたとおりのエリアミーティングであったと思います。加えて、岡澤AD、福井ゾンタクラブ、大津ゾンタクラブの皆さまのユーモアと善意溢れるプログラム進行に思わず笑ってしまう1日でもありました。

大阪に戻る列車の中で、当クラブの出席者4名は、基調講演「アウン・サン・スー・チーを語る」の講師大津典子氏と京都まで合流させていただき、大津氏の家庭、仕事、海外生活でのお話をうかがい、その飾らない、率直な人柄と生き方に触れながら温かく楽しい帰路となりました。

日本における外国人女性へのDVの実態と支援

岡田　千佳子

平成25年３月８日(金)、大山裕子さんに「日本における外国人女性へのDVの実態と支援」について、卓話をしていただきました。通常の例会は第２木曜日ですが、３月８日は、国際女性デー、ゾンタローズデーですので、それにあわせての例会の開催となりました。ゾンタローズデーに、女性の人権について改めて考える機会を得て、私たちにとって意義のある一日となりました。

大山さんは、ボストン大学でカウンセリングを学び、その後、アジア女性のDVシェルターで13年間働かれたという経歴をおもちです。帰国後、大阪大学大学院で、外国人女性へのDVの研究をなさっています。

DVを受けた女性は「DV被害者」と言われると、無力感にさいなまれるが、「DV被害当事者」「サバイバー」と言われるだけで立ちあがる気力が湧いてくるという話を聞き、何気ない言葉で人を傷つけ、勇気づけることもできることに感銘しました。

DVは、性差別に因りひきおこされる問題ですが、外国人女性にはより厳しく複雑化するようです。就業、国際結婚、またはその両方のために、外国人女性は日本にやってきます。日本男性は、パートナーである外国人女性に対して、従順で口答えしない、家事をする等のステレオタイプの女性像「日本人より日本人らしい女性」を求め、人格を認めようしない旧態然とした意識が根底にあるとDVが発生するようです。

外国人DV被害当事者がかかえる特有の問題も教えていただきました。

1. 言葉の壁：日本語がわからない。日本語を習わせてもらえない。
2. 社会的孤立：家から出してもらえない。最寄り駅がわからない。
3. 経済的暴力：母国への送金のトラブル。妻を性産業で働かせる。
4. 文化的暴力：本名を捨てさせ日本名をつける。母国をバカにする。宗教的戒律を守らせない。
5. 在留資格：夫に依存しなければ、在留資格を失う。

外国人女性は、これらの特有の状況にあるため、DVを受けるだけでもつらいのに、よりつらい現実に直面することになります。

そして、私達にできることは、このようなDVを受けている外国人女性がいる現状を知り、それを多くの人に伝えることです。それが啓発につながり、「おたがいさま」の精神の多文化共生の世界をもたらすとしめくくられました。私たちゾンシャンも微力ながらも、女性の権利を守るために、協力することを誓いました。

クロジョウビタキ

内藤　恵子

４年前の春、明け方に、素晴らしい、今まで聞いたことのない鳥の鳴き声で、目が覚めました。ベランダに出て、声の主を探しました。毎朝、５時にオペラグラスで観察し、見つかりました。ヒヨドリより１まわり小さく、オスの胸はとてもきれいなオレンジ色, 頭は青の鳥です。飛び方、枝にとまる様子を観察し、鳥図鑑で「クロジョウビタキ」と判明しました。旧野村証券寮３階部分の樋に巣を作っていました。翌年も、同じ場所に巣を作りました。インターネットで鳴き声を確認し写真も撮りました。３年、観察したので、知り合いに、わたしの鳥と自慢しました。そうしたら、聞いていたように、私の前に現れるのです。朝ラジオ体操をしていたら、ベランダに止まった鳥が、私をじっと見ています。飛び立ちません。急いで下の階のカメラを取ってきても、まだ止まっていました。よく見ると、巣立ったばかりの小鳥です。リビングにいると、庭で２羽の小鳥がうろちょろ遊んでいます。親鳥がミミズをくわえて、どこからともなくやってきて餌をやっています。1匹ずつ運ぶので大変です。１階にゴミを捨てにいくと、チリトリのなかに別の小鳥が隠れていました。１階は土がないので、自分で餌を捕れません。どうしようと一日心配しました。お客さんに驚いて「ぎゃー」と飛んで、室外機の上に隠れました。そこに親鳥が来て、小鳥がいないので、大騒ぎです。小鳥に「早く下りておいで、お母さんが来たよ」と言っても、怖がって降りてきません。１日過ぎ、次の朝もゴミ出しにいったら、どこからともなく、ちょこちょこと出てきて、私をじっと見つめます。どうしようと思っていたら、親鳥がすーっと現れました。早く、人が来る前に飛んで行ってと、追い立てました。これは去年の話で、今年は、３羽の小鳥が大人になり、帰ってきました。見つかる機会が３倍になり、オペラグラスで探していても、２羽が同時に見つかったりします。３羽は家を自分のテリトリーと思っているようです。食堂の前の電線に止ってこちらをじーとみているので、父に「見て！」「97の年寄りに見えないよ。」「すぐ、そこにいる、見える場所よ。」見えたそうです。普通、人間の目線を感じたら、飛んでいくと思うのですが、安心しきっていて、私の目線は合わせてくれます。友達がゴルフの迎えに７時まえにきたときも、駐車場のうえに止って、早く紹介して、と言わんばかりでした。また、診察中に６歳の女の子が嘔吐して、窓を開けたら、隣の塀の上で２羽が大喧嘩しています。スタッフも呼んで皆で、笑いながらみていました。なぜか、私の目に着く所にいます。これ、本当の話です。去年愛犬をなくしたので、鳥に癒されています。５時に起きて、鳥を探してください。

編集後記

広報誌編集の時期がやってきました。いつものことながら、おしりに火がつかないととりかかれない・・・これは性分ですから、一生こんな調子でいくのだろうと思っています。
ゾンタメンバーの大半は仕事を抱えながら奉仕活動をこなしています。いや、そればかりか、この頃は年齢的にも親の介護や孫の世話など忙しそうです。そんな中、恐縮しながら広報誌寄稿のお願いをしても、どなたもいやな顔をせず引き受けてくださることに頭が下がります。
相手の立場にたって相手の利益を考えながら行動することこそ、ボランティアの根本と改めて感じ、いい仲間と知り会えたことに感謝しています。

辻　康子